

様式第3号（第4条関係）

会 議 録

1 附属機関等の会議の名称

令和8年度 第1回丹波篠山市史編さん委員会、通史編専門委員会

2 開催日時

令和8年7月12日（日曜日）午後3時から午後4時30分まで

＊傍聴の受付時間（午後2時30分から午後2時45分まで）

3 開催場所

丹波篠山市西紀支所 202 会議室

4 会議に出席した者の氏名（敬称略）

（1） 委 員 今井 進、奥村 弘、市沢 哲、大江 篤、池田正男、古市 晃、
堀井 宏之

（欠席）藪田 貫、清野未恵子、加藤善朗

（2）執行機関 丹後政俊、岸野良広、山本毅、成田雅俊、北川勝也、山本有子

（3）そ の 他 松本充弘

5 傍聴人の数

0人

6 議題及び会議の公開・非公開の別

（1）事務局体制について

（2）令和8年度事業の進捗状況等について 公開

（3）令和8年度専門部会の進捗状況等について 公開

（4）専門部会間の調整・協議事項について 公開

（5）刊行物の書名等について 公開

（6）『自然環境編』について 公開

（7）令和9年度事業計画（案）策定方針について 公開

（8）委員の委嘱期間について 公開

7 非公開の理由

—

8 審議の概要

(1) 開会・あいさつ 今井進編さん委員会委員長あいさつ

丹後教育長あいさつ

市史編さん委員会 今井委員長あいさつ

(2) 報告事項

ア 令和8年度事業の進捗状況等について

事務局より報告

松本特命助教より報告

【意見等】

(A委員) 同志社大学にあった資料の名称であるが、「旧蔵文書」は良くないのではないか。そのあたりは事務局だけで話したのか。

(特命教授) 部会では今の名前では出ていないが、確かに資料群の名称は考えなければいけない。入った経緯もいろいろあるようで、先生の個人的な収集に関わるものも多分にあるだろうし、大学図書館の管理の蔵書カードが入っているものもあるので、購入を経たものもある。

(A委員) 購入したものはそれでいいと思うが、そうでないものの方が圧倒的に多いのではないか。そのあたりは今後ちゃんとしておかないと、いろいろと大変だと思う。

(特命教授) 承知した。今後整理したい。

(委員長) よろしく願います。他にないか。報告事項も多くあるので、折に触れて指針等を伺うこととする。

イ 令和8年度専門部会の進捗状況等について

各部長より報告 ※部長が欠席の部会は事務局より報告

【考古編専門部会】 池田委員から報告

- ・ 6月19日に第15回部会開催
- ・ 令和8年度は事業計画として資料に記載している(1)から(7)のまで進めている。
- ・ 掲載遺跡件数は、遺跡に該当するもの130件、遺物として現在保存されているもの13件、合わせて143件の項目について記載する。
- ・ 目次・構成案、ページの立て方、レイアウトの検討、原稿案の内容を検討中。掲載候補遺跡の執筆者も確定。先生方をお願いするページ数の割り当て案も出し、構成案の検討、執筆者の確定と合わせて、今、遺跡の執筆者にお願い・依頼しようというところである。

【古代編専門部会】 古市委員から報告

- ・ 6月13日と14日に第1回・第2回を開催。大まかに史料編の掲載範囲と分担者を決定。同日、市内巡検を実施。
- ・ 7月4日、5日には丹後の熊野郡（現在の京丹後市）、久美浜から網野、峰山と回り、市外巡検を行った。丹後を含めた古代の丹波を考えるという考え方で知見を深めた。今後もこうした活動を継続。

【中世編専門部会】 市沢委員から報告

- ・ 4月14日に和田寺文書の中の中世文書の撮影を東京大学史料編纂所の協力で実施。
- ・ 5月16、17日に部会を開き、大山荘編、中世史料編の構成や作業の進め方について議論するとともに、観福寺の大般若経の撮影・調査を実施。
- ・ 6月9日に龍蔵寺の大般若経の調査を近世部会の特命教授先生にも協力いただき調査を実施。
- ・ 龍蔵寺の大般若経は興味深い史料なので簡単に紹介する。

全てを開ききっておらず、不明なところもあるが、中世経典を多く含む。版経が多く、一部書写経も含まれている。版経は恐らく、鎌倉時代に奈良で改版された春日経でないかと思われる。書写経の中には中世に遡るとされる古い経巻も含まれている。形状は卷子経だが、一部を除いて大変状態が悪い。開くごとに破損するのではないかという状況。

三田市の蓮華寺で校合された経典が複数見つかっている。賀茂郡上鴨川の住吉神社に伝来した経典と兄弟関係にある。龍蔵寺と上鴨川のお経を比べると校合時期、校合場所、校合者も一致する。摂津の国の北端から賀茂郡と多紀郡に経典が分流していくことを確認できる。

もう一つは高砂市の伊保荘という荘園の天満宮に寄附された経典の中の1巻が確認されている。応永元年、室町時代に伊保荘の実勝という人が揖保天満宮に寄進した600巻のうちの1巻であることが分かった。兵庫県史で注目されている曾根文書によると、この1年後の応永2年に同じ人物が同じ天満宮に寺領を寄せたという寄進状が残っている。寺領寄進とお経寄進を1年違いで一人の人物が行うというのは中世では珍しいケースである。大般若経600巻と寺領を連続して寄進することができる財力を持った人物が曾根荘にいたということは、中世を考える上で興味深い。

丹波篠山市史というよりは高砂市史の史料として重要なものが出てきた。稲美郡の荘園鎮守の経典がどうして多紀郡に流れてきたのかということも要検討。滋賀県瀬田の少林庵というところに安置された東福寺のお坊さんが書写した経典というのも、これは中世に遡る書写経が2巻確認されている。

少林庵という所は現在のところ、どこかは確認できていない。滋賀県は大般若経の悉皆調査を実施した記録を持っている。丹波篠山市史編さん室を通じて照合をかけてこの経典については考えていきたい。

先ほど版経は春日経だと申し上げたが、形状から見て春日経かと思うところがある。春日経は1枚1枚の紙を刷るのではなく、紙を連続して貼り継いで長い状態にしてから刷っていくという特徴がある。龍蔵寺のお経はそういう特色を持っている。決定的なのは、前回調査で興福寺一条院という奥書を発見したということである。奈良県に残る春日経の刊記を整理した稲城信子氏の論文があるが、これによると東吉野村の法蔵寺というところに344巻の春日版大般若経が残っていて、これに一条院という刊記があるというデータが示されている。まさに龍蔵寺の344巻が一条院の刊記を持っている。東吉野村のお経と龍蔵寺のお経は一部兄弟関係にある可能性も出てきた。

一方、観福寺の大般若経については、すでに田岡香逸氏による紹介があるので大体の概要は分かっている。また、尼崎の久々智村から流入した経巻がかなりあるが、これは奥書が『尼崎市史』に紹介されている。こちらの方はかなりよく知られたお経である。形状は折本装で、固着して開くことが難しいものが多い。書写経も200巻ぐらいあるが、全て開くものは稀な状態で奥書の撮影を進めている状況である。

金山さんが修復の関係で市史編さん室に来られていると聞いているが、お経の方も見ていただいて、応急処置として可能なことは何か、固着している状態で今後どうしていったらいいかなど、ご協力いただければ大変ありがたい。

【近世編専門部会】 藪田委員欠席のため松本特命助教から代理報告

- ・前回の編さん委員会の直前に藩政日記調査報告会を実施。学生、院生による4本の報告をいただいた。
- ・篠山藩青山家日記調査報告書について、今年度編集作業を行い、来年度の刊行を目指して取り組みを進めている。藪田先生と月1回の部会長協議を実施。報告書の内容検討を進めている。報告書は現在のところ3部構成を予定しており、全体として最大300ページを考えている。第1部に日記の解説、第2部に合宿に参加した学生、院生の論考、第3部に青山家文書全3000点のうちの600点の日記の目録に加えて、かつて中野卓郎先生が作成された青山家文書全体の目録をつけることを検討している。
- ・8月24日から26日にかけて、近世部会藩政日記調査合宿を実施予定。作成した目録カード約600点の内容の見直しを予定。通常の日録に見られるような標題、年代以外に史料の状態、日記の作成部署、日記に書きこまれた

天候の有無などの情報を付け加えて目録カードを作成しているので、全体を通じて報告書に掲載するために統一する作業が合宿の主になる。

- ・第2部論考に対する藪田委員長の提案を資料に示しているが、特に2番目の論考は400字詰め原稿用紙10枚から15枚、参加記が3枚程度。同志社大学、関西大学、神戸大学の10名前後のエントリーの意思確認について、先生方を通じて行っている状況。
- ・日記の性格を推定する上で、その時藩主がいるか、いないかによって日記が影響を受けるのではないかという話があったが、しっかり読み込まないと藩主の所在が分からなかった。令和元年度に古書店を通じて神戸大学に購入いただいた「禮典」という史料の中に青山家歴代藩主がいつ参勤したかとか、江戸の幕閣でどのような職にあったのかなどの情報がまとめられていたので、ある程度推測することは可能と考えている。
- ・「禮典」自体、藩政日記ではないが有用な史料かと思われる。幕末の嘉永期頃から明治10年にかけて、篠山藩の留守居役で江戸藩邸に詰めていたと思われる二木正毅により編纂された青山氏15代の事績である。総点数は明らかではないが、1巻の「類集」と、5巻・6巻からなる「前後編」という構成で、そこに6巻の「附録」がつく。令和元年度に購入いただき、電子データ化も行っている。
- ・「禮典」類集の序文を確認すると、安政4年で幕末だが、二木正毅が先例を調べる手段とするために、青山忠高以降の事績を集めて禮典と名付けた史料を作成された経緯も書かれている。前編に万延2年、安政4年から更に数年くだっている。安政4年に二木が藩主に随従して篠山入りしたということから、二木は常に江戸藩邸詰めで、藩主は参勤で篠山に帰ってきたときに久々に右筆書の小日記を見る機会があった。小日記から慶安寛文期以来の過去の藩体制がよく分かり、藩政日記の使い方についても若干書かれている。その後、二木は篠山藩での勤務開始とともに禮典を記述し、その傍らで筆耕者も雇い入れて古い藩政日記の抄録に取り組んだ。既に失われてしまったものもあったが、元禄14年までの項目を万延2年の時点で写し終えた。
- ・日記の来歴、いつの段階で戻ってきたのか、国元にあった日記が移動することがあるのかということが近世部会の課題として挙げられている。
- ・青山家文書の藩政日記についても開くことができないという問題がある。近世部会の安藤委員より金山先生を紹介いただき、昨年度末より丹波篠山市に金山先生に通っていただき、3月16日より楮手すき和紙による「仮止め」の方法の講習を受けた。仮止めとは、極薄の和紙を、養生する必要のある箇所の上からメチルセルロースを使って貼り付ける方法で、本格的な修復を行うまでの間、史料の状態を悪くしないための修復措置である。当面読みたい

ものについても、この仮止めを行うことで破損の進行をできるだけ食い止め、読むことができる。2024 年度に板状に固着した藩政日記のめくり作業を行った。その中から「年中行事」というものを取り出して修復を試みている。藩政日記の中で、百姓一揆が起きたとか、藩主が幕閣の要職に就いたとか重要な年次ではあるが、破損の甚だしい藩政日記をワークショップに用いて修復作業を実施している。6 月 24 日のサポーター会議でもこのワークショップを金山氏指導の下実施した。古文書を読んだり、目録を作成する方法とは違う手法で、歴史史料に関わってくれる人を増やす方向に修復ワークショップをつなぐことができると考えている。金山先生には、藪田部会長を通じて藩政日記調査報告書にも寄稿を依頼している。

- ・ 6 月 4 日の丹波篠山市民文化講座に青山家の現在のご当主である青山忠義氏のご夫妻で来られたので、委員長を囲んで懇談の機会を持つことができた。
- ・ 6 月 28 日は心学の報告会を開催。日置地区の心学校舎である中立舎で現地資料報告会が開催された。心学の教えを分かりやすく絵や文書で解き示した施印という史料が、中立舎には大量に残っているので安藤委員より解説をいただき、前田協力員からも鳳鳴高校の心学資料の内容もとりまぜながら、中立舎の活動について説明をしていただいた。藪田部会長や地域から色々な話を伺った大変充実した報告会だった。
- ・ 藪田部会長の提案で今月中に亀岡文化資料館の調査を予定。形原松平家が所蔵している、篠山藩時代の御用止めを調査する予定。

【近現代編専門部会】 奥村委員から報告

- ・ 近現代部会はほぼ毎月 1 回ずつ会議を開いてきている。今年度は、一つは 5 月 23 日に青山歴史村で近世部会と一緒に調査を行った。かなりの量の史料が一旦東京に持ち出され、また帰ってきており、その間に史料が固着してしまったという事情があるようだが、その具体的な記録が残っておらず、これを明らかにしたい。両者協力しながらやっ払いこうということで対応した。明確になっていない部分もあるが、いくつか資料も出てきており、それが東京にあるのではないかとということもあり、前よりは史料の動向も分かってくるのではないかと考えている。引き続き近世部会と連携して取り組んでいきたい。
- ・ 近代史の方としては、篠山の場合、旧篠山藩の枠組みが近代においても東京との関係で重要な位置を占め続けているので、これを何らかの形でちゃんと考えなければならない。近代史研究の中で旧藩が近代に入った時の役割はあまりなく、九州の柳川藩や佐賀藩がその後どう展開したかという研究くらいしかない。特に兵庫県は旧藩の史料が少ないので、これをうまく資料編や本

文編に組み込んで、中央と地方の関係もしっかり考えなければならないということで、今後取り組んでいこうとなっている。

- ・もう一つは新聞資料で、これは事務局にかなりやっていただいている。工業高校などでも調査を行い、篠山の特色として地域の新聞がたくさん残っていることが分かった。篠山新聞など古いものもあり、今まで続いているものもあるが、そうでないものも含めていくつかあり、現在デジタル化していただいている。かなりの部分が今年度で終わっている。
- ・それだけでなく、明治初年から、近代は情報が新聞資料に載ることが多いので、例えば大阪毎日新聞（旧・大阪日報という名前で、関西で一番古い新聞になる）などに篠山が現れてこないかチェックしていく作業を、本文編のために続けていく。出来上がってからも、篠山全体の近代の情報のよりどころとして市民に公開していくということについて打ち合わせをした。
- ・資料編に関しては、資料が非常に多いという問題をどう対処するかという大問題がある。例えば杜氏に関する資料が戦前から戦後まである。全体に関しては旧満州から朝鮮半島まで、出かけているということが資料から分かる。
- ・酒造関係の史料であるとか、また、他の地域では残っていない史料が、連隊があったからなのか、旧行政村の資料がよく残っていて、その中に明治の資料がたくさんある。戦後、財務省が焼却命令を発し、姫路などは3日間焼き続けたことが伝わっている。行政村の資料ごと焼いてしまって何もないというパターンが多いのだが、篠山ではそれとは違い、地域の行政や住民の動きが分かる資料が厚く残っているので、これをどうするかという問題がある。
- ・個人蔵の資料も含めて近世以来のものもあり、資料はとても1冊の資料集には載らない。その時に、どういう形で市民の方々にアクセスしていただけるものを残していくのか、調査自体も市史の期間だけで終わらないだろう。持続的に調査研究・保存・公開していくにはどうしたらいいかという見通しも含めて、市史の期間中にしっかりとすることをするにはどうすればいいか、毎月議論を重ねている。以上である。

【自然環境編専門部会】 清野委員欠席のため事務局より報告

- ・自然環境編については、令和6年度から継続して原稿の執筆・取りまとめ作業を行い、8年3月末をめどに原稿の提出を受け、新年度に入って4月27日にオンラインも含めて全執筆者が参加する編集会議を開催した。
- ・最終原稿を6月24日として取り組まれ、ほぼ原稿が全部出ている状況。同時に印刷製本会社の契約も終え、今週中に原稿の入稿を行うようスケジュールを進めている。詳細は協議事項（3）で説明する。

【文化財編専門部会】 加藤委員欠席のため事務局より報告

- ・文化財部会は部会長が欠席のため、代わりに簡単に報告する。来年度の文化財編刊行に向けて、精力的に各文化財の調査を進めていただいている。
- ・建造物調査では川島先生に毎月のように来ていただき、市内に残る建造物の実測調査や現地確認をお世話になっている。
- ・加藤部会長には仏像・仏画などの美術工芸品を含めて調査いただいている。
- ・ここには挙げていないが、久下先生には市内の民俗文化財の調査・過去の調査の整理をいただき、中西先生には書籍・文学関係の資料の調査に精力的に動いていただき、来年度の刊行に向けて原稿を準備中である。
- ・6月5日には部会を開催

【地域編専門部会】 大江委員、松本特命教授より報告

- ・昨年度の3月7日に城東部会と多紀部会にそれぞれ出席し、原稿を見せていただきながら進捗状況を聞いた。多紀部会は今年度末が原稿締め切りで、村雲・大芋・福住それぞれで書いていただいているところである。それを目次に沿って私の方で整理する形で、足りているところ・足りていないところを、来月4日に伺って見ていきたい。まだ全ては上がっていない。
- ・7月8日の城東部会は、個人の原稿を見せていただいた段階。
- ・両方の部会に3月に伺った中で、文体を「ですます」にするのか「である」にするのかという点について、部会の中でも意見が分かれている。「ですます」調にすると分量的な問題も出てくる。方向性を分かっただけで統一する形にすることが課題。
- ・縦書き・横書きの問題も、書き手によって意見がそれぞれある。多紀部会については8月4日に意見を聞きながら調整。
- ・基本的に地域編については記憶をきちんと文字化していきましょうということで、アンケートを使ったり、方言を一覧表にしているところもある。そういったものを整理しながらやっていくのが実情である。

(特命教授)

資料4ページの「地域編の編さんの動向」であるが、3月7日の城東部会、多紀部会を通じて今後の方針を決めた。その段階で決まったのは、版型をB5判の縦書き2段組にするということだった。しかしその後、それでは書きにくいという意見も多数寄せられ、一方でそれに則って作業をされている方もあり、これをどう収束させるか、地域の個性があるとはいえ文体などにばらつきがあると体裁が取れないという問題があった。

7月8日に城東部会が行われ、原稿の取りまとめは来年2月末を目処にして、次年度の刊行に向かうことが決められたが、先行する多紀部会の状況に合わせて

いきたいという意見もあり、書式や文体について、編さん委員会での先生方の意見や方向づけをお願いしたいということであった。

最も重要なことは、地域編にふさわしい文体はどのようなかという点である。7月8日の城東部会でも、説明の文で用いる文体と伝承、説話に用いる文体と資料として取り上げる文体には違いがあるとの意見があった。「ですます」調か「である」調かについて意見が分かれている状況である。

また昔話については、城東部会では語り手のライフヒストリーによっては昔話であっても篠山の話ではない場合もあるので、その取り扱いをどうするかという意見もあった。

「である」か「ですます」について、地区内で歴史や民俗に関する資料を自治会の紹介とともに取りまとめた経験を持つ方も多数おられ、その中でも「刊行物に出すには『である』調がふさわしい」という方もあれば、「市民に手にとってもらうのだから『ですます』調の方が親しみやすい」という意見もあり、なかなか一律にこうしてくださいとは言にくい状況である。大枠の方向性として、先生方の意見を伺ってみたいというのが地域の意向である。

地域編のサポートについては、各地区の構成や目次案について、揃いつつある多紀部会や、これから書く城東部会を見ながら内容を提案したいが、私の方でも今は十分でない。先日、城東部会の翌日の多紀部会（7月9日）に、村雲地区の東浦さんという委員の方が編さん室までお越しになり、書式や文体など困りごとについて率直な意見を伺った。こうした意見交換や、地域の執筆にあたっの調べもので気軽に立ち寄れる状況が今後できていけば、相互の意見交換も進むと個人的に思った。

8月4日には多紀部会が予定されているので、そこで書式や分担の話が出てくると思うが、どうしていけばいいか、他の部会の先生方にも意見をいただきたい。以上である

【意見等】

（委員長）各部会から進捗状況を報告いただき、大体の流れは委員の先生方に理解いただけたと思う。質疑応答については、次の協議事項（1）専門部会間の調整・協議事項に含めて改めて行うということでよい。特に意見がないようなのでそのように進める。

（3）協議事項

ア 専門部会間の調整・協議事項について

事務局より説明

【意見等】

（委員長）地域部会において表現を「である」調にするか「ですます」調にするかで意

見が分かれている。編さん委員会で決定して欲しいという意見であった。何らかの見解をお示しいただく方が取り組みやすいとのことだった。

(B委員) 3月にも申し上げたが、「ですます」の方が読み手にとっては読みやすいかもしれないが、一文が長くなる。盛り込みたいことが山のようにあるので語りを活かすところが、地元の言葉も生かしつつ、引用で分かるようにする形で「である」調がいいのかと考えている。執筆者が原稿を入力するのに縦書き二段組が難しいということであれば、ベタ打ちにして、編集者で修正を入れていくという形でよいのではないかと考えている。地域編なので、地元の皆さんが読まれるのも大事かと思うが、ルビをたくさんふっていくであるとかいうことも必要かと思う。

(委員長) B委員、そうすると、地域編のことに関しては「である」調で進めるということではどうか。「ですます」だと字数も増えてくる。中には、方言などが出てくるところでは「～やで」等の表現でいいかもしれない。

(B委員) メリハリはつけた形の方がよいかと思う。

三木市の市史は本文が「である」調で、「声を出して読むふるさと〇〇のこぼれ話」というコラムでは「ですます」調で作っても構わないとした。「ですます」調を使える場所も作ればいいのではないか。お話しなのか歴史的事実なのか分からない思い出をお話しとして書いていただければと思う。

(委員長) 事務局、いかがか。8月4日の多紀部会でも話をしてもらい、それをもって城東部会も同じようにしてくれとしてはどうか。

(事務局) 本日のご意見を基に説明する。

(特命教授) A4、B5の問題、縦書き、横書きの問題はテキストデータがあれば事務局等で対応できる。

(委員長) 多紀は一部に、できればA4横書きで進めたいという意見の方もいる。それは、編集作業でどのようにでもできる。完成したときの形を示した方がいいのかもしれない。

(事務局) 先日、様式で悩まれていた部会委員の方が市史編さん室に来られた。他市の市史をご覧になり、これなら見やすい、読みやすいとおっしゃられた。原稿を縦書きで自分自身が入力しなければいけないと思っておられたが、普段使われている横書きのフォーマットで作成していただいて事務局や業者で修正し、ご希望のレイアウトを教えていただければ事務局で原稿を整えると安心された。執筆者とはよく話を進める。

(委員長) 「である」調で進めていただくこととする。8月4日の多紀部会での説明をお願いします。

その他、部会間の調整についてご意見等はないか。

(C委員) 金山先生の件についてお願いしたい。

(特命教授) 先日のワークショップの際には経典の修復について話をした。

(委員長) D委員、古代史部会は考古との関係はいかがか。

(D委員) まだその段階ではない。もう少し体制を整えてからご相談させていただきたい。

(委員長) 池田部会長と古市部会長で調整をお願いします。

それぞれの部会間での調整をお願いします。

イ 刊行物の書名等について

事務局より説明

- ・市史の出版を令和8年度から令和15年度の間で計画的に刊行
- ・令和8年度が初めての市史出版となることから本の書名を決定する必要があることから事務局案を提示。

【意見等】

(委員長) 委員の方からご意見はないか。

特に意見がないようなので、事務局案で進めていただき、先ほどの説明でもあったように、副題については各部会でも協議いただき、次回の委員会でご意見として挙げていただくことでよいか。

(A委員) 副題については改めて相談したい。

(委員長) 部会ごとに協議いただきたい。

(B委員) 地域編は番号を通していくのか。ハードカバーではなく体裁も違う形となるのか。番号は11、12となるのか。

(事務局) 現時点では、地域編までは同じ仕様で考えている。

(B委員) 多紀、城東の次は13巻となるのか。

(事務局) 将来的にはそういう視野も含めて考えている。

(E委員) 私もそこが気になっている。東から刊行していくと次は篠山だが、どのタイミングで着手するのか。市史全体の刊行があるのでそれが終わってから地域編の続きに入るイメージか。

(B委員) 本当に着手するつもりなら、事前の準備があるので地域編の2が終わるころに次の地域の調査を始めた方がよい。ただ、お金の問題や準備と体制の問題もある。地域編3を作る頃に他の市史の刊行が佳境に入る。三木市では、2冊地域編を作りながら、3冊目の本編を作るようなスケジュールで進められ、体制も整わず予算的に繰越状態となっている。あまり無理もできないので、1冊刊行したところでどうするかを再度、この会議で議論いただきたい。この件については、今のところは保留としたい。

(特命教授) 日頃、地域資料整理サポーターなどでお世話になっている様子から、旧丹南町地域は聞き取りや調査などの下準備を考えてもいいのかと思う。できるかどうかは不明。

- (A委員) 可能なところから調査だけはやり始めてはどうか。
- (特命教授) 地域資料整理サポーターの力を借りたい。
- (A委員) 報告書は別巻となっているが、他であれば紀要に掲載したいとか、紀要が報告書のようにになっている自治体もある。そのあたりの作り方について、他の巻でスピノフしているものが出てきたときにどうするのか。丹波篠山市は今のところ紀要はなく、それを掲載する場所がない。どう対応するのか別途課題であると感じている。
- (C委員) 中世でも篠山の中世文書についての本を何らかの形で考えている。A委員が言われたように、そういうものも含めた枠組みをどうするのか、どこかで議論いただければ有難い。
- (A委員) 近現代では酒造については「篠山と酒」のような別巻が必要ではないかという意見が出ている。出すかどうかは分からないが、取り組みの中でそういった広がりが出る可能性がある。市の歴史文化や観光において大事な役割を果たすかもしれない。そのあたりは要検討である。
- (委員長) もう一度原点に立ち返って、検討する必要があるかもしれない。大山の荘園などどうしても書き残しておきたいものがある。近現代の産業を支えた砦石鉾山であるとか、かつて丹南町史ではあまり執筆されなかった部落史の問題も具体的に資料が出てきている。そういったものに紀要で対応するのか、沢山課題がある。そのあたりも含めて検討する必要がある。
- (B委員) 地域編はこのままで終わるわけにはいかない。
- (委員長) 地域編は最後、今田まではいきたい。次回の委員会でも課題として残して協議したい。地域編は多紀、城東だけで終わることはできない。全て完結していくという方向で進める。
- 刊行物の書名については、事務局の提案を基本として、副題については各部会で協議いただきながら進めることでご理解願う。

ウ 『自然環境編』について

事務局より説明

- ・刊行時期見直し及び発刊の進捗について
- ・見直し後の刊行スケジュール、現状について
- ・本の表紙カバーについて

【意見等】

- (委員長) 自然環境編について刊行スケジュールの説明があった。
- 表紙カバーのデザインが課題である。出版社から3案出ている。これらについて意見をいただきたい。
- 表紙デザイン案は3案から選ぶということか。

- (事務局) そうではない。第一案ということで出してもらった。
- (委員長) デザイン案をベースにしながら、次の委員会で再度提案いただくということか。
- (事務局) デザイン案がベースではなく、再度見直していただき、本日、委員の皆様からご意見をいただき、印刷業者と調整の上、次回委員会で良いデザインを提案したいと考えている。
- (委員長) 刊行スケジュールについては資料の通りである。部会長の復帰を待って進めていかれる。未提出の原稿もあるということで、事務局の提案通り進めていただくこととする。
- 表紙カバーの件についてご意見をいただきたい。
- (F委員) 各巻ごとにこの表紙のデザインを考えなければいけないのか。一つの定まった表紙で進めた方がよいのではないか。
- (事務局) 三木市史に関しては、本編は全て同じデザインである。地域編については、カバーの同じ位置に地域ごとの写真が入る。八尾市史はベースのフォーマットは同じで写真が少し変わる。
- (A委員) 三木市史の表紙は「形紙」という伝統産業のデザインとなっている。色も深くていい色であるという意見でこのデザインで進めることになった。篠山全体を代表したよいデザインがあればそれを活用すればいいと思う。なかなかいいデザインがない。よいデザインが思いつかなかった。
- (事務局) 丹波布の「縞帳」というものがある。丹波篠山市史の始まりで、神戸大学とつながるきっかけとなった日置の中西家から出てきた資料である。歴史資料を保存して生かそうというきっかけとなった家からの資料で、デザイン的なものでもある。カバーのデザインとして活用できないかと考えた。
- (C委員) 厚みの太い本には、印刷業者が提案する明るい表紙のデザインは合わないように思う。本の大きさも考えて提案いただきたい。サンプルをもう少し出していただきたい。
- (A委員) 明石市史は市長が表紙の文字を書いた。表紙の文字の漢字パターンについては、市長が書くパターンと文書から拾ってくるパターンがある。文書から集めてきて組み合わせて作る。あとは、市内を代表するような書家の方に依頼する。書家が亡くなられている場合は、その方の文字から拾ってくる。篠山らしいものがあればいい。あとは単純に三木市史のようなシンプルな文字にするパターンもある。
- (C委員) 資料編、本文編を作成して、それぞれの巻について時代を象徴するものを表紙カバーのデザインに入れるのは大変である。全巻を通じて統一感のあるデザインにするなら、提案のあった丹波布の「縞帳」デザインを上手に使う方法がよいのではないか。

- (A委員) 一つの家だと思ふ。色合ひも落ち着いている。
- (C委員) 三木市史の「形紙」による表紙カバーも最初はどうなるかと思つたが意外と納まつた。
- (A委員) 未来に、これが何かと尋ねられたときに説明できるようなものがあると思ふので、そういう意味では「縞帳」はよいのではないか。
- (委員長) 「縞帳」は残っている。
- (A委員) 文字はどうか。「丹波篠山市史」という文字は可能であれば、明朝体ではないものにできればと思ふ。書家の方はおられないのか。もう少し検討いただいてはどうか。
- (委員長) 丹波篠山市の書家に三宅剣龍氏がおられた。もしくは、亡くなられたが河合雅雄先生。どちらかになるか。
- (特命教授) 三宅剣龍氏はいつ頃の方か。
- (委員長) もう亡くなられた方である。市立小学校の校門の文字も書かれた方である。
- (A委員) 近世か中世の古文書に文字がないか。
- (F委員) 「篠山」という文字を使うようになったのは明治以降になる。
- (特命教授) それ以前は「笹山」が使われていた。
- (委員長) 一度、事務局で検討いただき、次回の委員会で提案いただき、その中から考えてはどうか。

エ 令和9年度事業計画(案)策定方針について

事務局より説明

【意見等】

- (委員長) 事務局の提案に対してご意見はないか。
特にないようなので、このあたりについても持ち帰っていただき、次回の委員会にご意見を頂戴したい。

オ その他 委員の委嘱期間について

市史編さん委員及び通史編専門委員について、事務局より引き続きの就任を依頼

(4) 次回開催時期について

次回開催日程：令和8年12月6日(日) 14時から

(5) 閉会

奥村弘編さん委員会副委員長・通史編専門委員会委員長あいさつ